中区栄１丁目

第Ⅲ次竪三蔵通遺跡発掘調査
概要報告書

１９８６

名古屋市教育委員会

例　　言

1．本書は、名古屋市中区栄１丁目2001―２番地に所在する竪三蔵通遺跡（市遺跡台帳番号７―４）の第Ⅲ次発掘調査概要報告書である。

2．調査は、名古屋市教育委員会が実施した。

3．発掘調査に関わる調整事務は、文化課が担当した。

4．発掘調査は、同市教育委員会名古屋市見晴台考古資料館学芸員（山田鉱一・木村有作伊藤厚史・野澤則幸）が担当した。

5．発掘調査は、昭和60年９月10日から11月15日にかけて実施した。

6．発掘調査に至った契機は、郵船興業株式会社が倉庫建設を計画したためである。

7．調査区の基本平面図作成業務は、中日本航空株式会社に委託し、空中写真測量で実施した。測量データは次のとおり。

　高度：23.5m　　縮尺：150分の１　　気象：晴

　カメラ：ウィルドＲＣ８　　図化機：アビオリットＡＣ１

8．発掘調査の実施に際して、特に事業者である郵船興業株式会社には、よく文化財保護の主旨を理解いただき、工事遅延はもとより調査経費の負担も快よく応じていただいた。ここに記して謝意を表する。

9．また、以下の方々にも御協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

㈱日本郵船・㈱郵船航空サービス・㈱白井設計・㈳喜峰会岡山病院・東海電気工事健康保健組合

10．発掘調査の現場業務と本書の作成にあたっては次の方々の御教示、御協力をいただいた。記して謝意を表する。

楢崎彰一・渡辺誠・加納俊介・川崎みどり・中野良法・山岸賢一・左右木未起・竹内宇哲・鷲野尚行・山田敬三　（敬称略）

11．出土遺物、記録類は、名古屋市見晴台考古資料館で保管している。

12．本書の編集・執筆は、伊藤が行なった。

目　　次

Ⅰ．位置と環境…… 1

Ⅱ．調査に至る経過…… 5

Ⅲ．調査の経過…… 6

Ⅳ．調査の概要…… 9

　1．遺構…… 9

　2．遺物……13

Ⅴ．まとめ……16

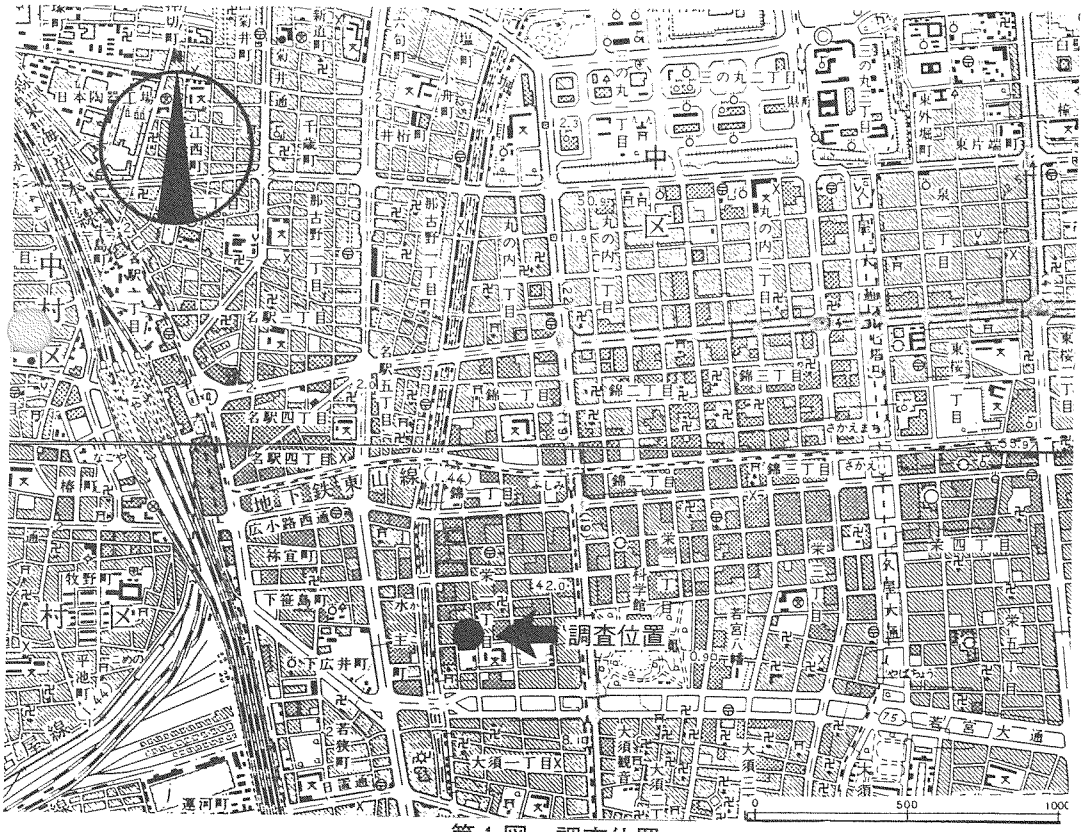
図　　版……19

写真図版……29

Ⅰ．位置と環境

竪三蔵通遺跡は名古屋市中区栄１丁目に所在している。国鉄名古屋駅から東南へ約1.1kmの距離である。名古屋市街地の中心部は、今からおよそ３万５千～３万年前の新生代第四紀更新世に古木曽川が運んできた土砂の堆積によって形成された河成平野が隆起し、段丘化したと考えられる面（熱田面）にのっている。この中位段丘面は西北より那古野台地、熱田台地、御器所台地、瑞穂台地、笠寺台地にそれぞれ分かれている。

本遺跡はこのうち最も西側に張り出した那古野台地の南西縁部、標高５～10mに立地し堀川をはさんで西に広がる沖積平野を望む位置を占める。那古野台地は、江戸時代の城下町を継承して発展してきたため、最も早く都市化の進んだ地域であり、そのために遺跡は街地の中に埋もれたままよくわかっていない。本遺跡もその例にもれず、昭和45年頃発見され、昭和56年の分布調査の際改めて弥生時代から中世にかけての遺物散布地として台地南端が遺跡として知られるようになった。ところが最近２ヶ所で調査を行なった結果、古墳時代から中世にかけての遺構、遺物のみでなく、近世の屋敷跡や濠を検出し、名古屋城下町を復元する上でも重要な遺跡であることが明らかとなり、遺跡の推定範囲も図２のようにさらに広がったのである。

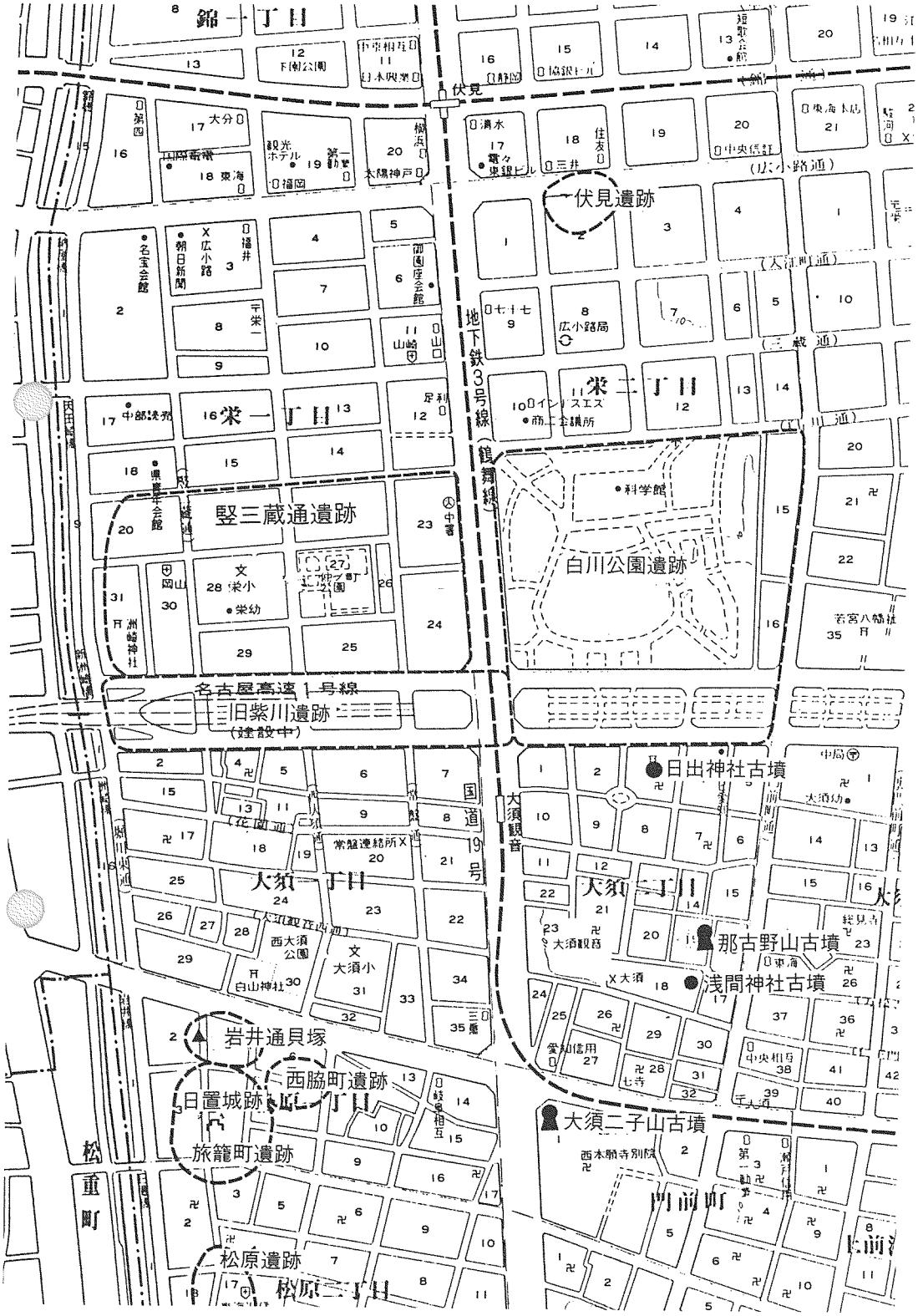


第１図　調査位置

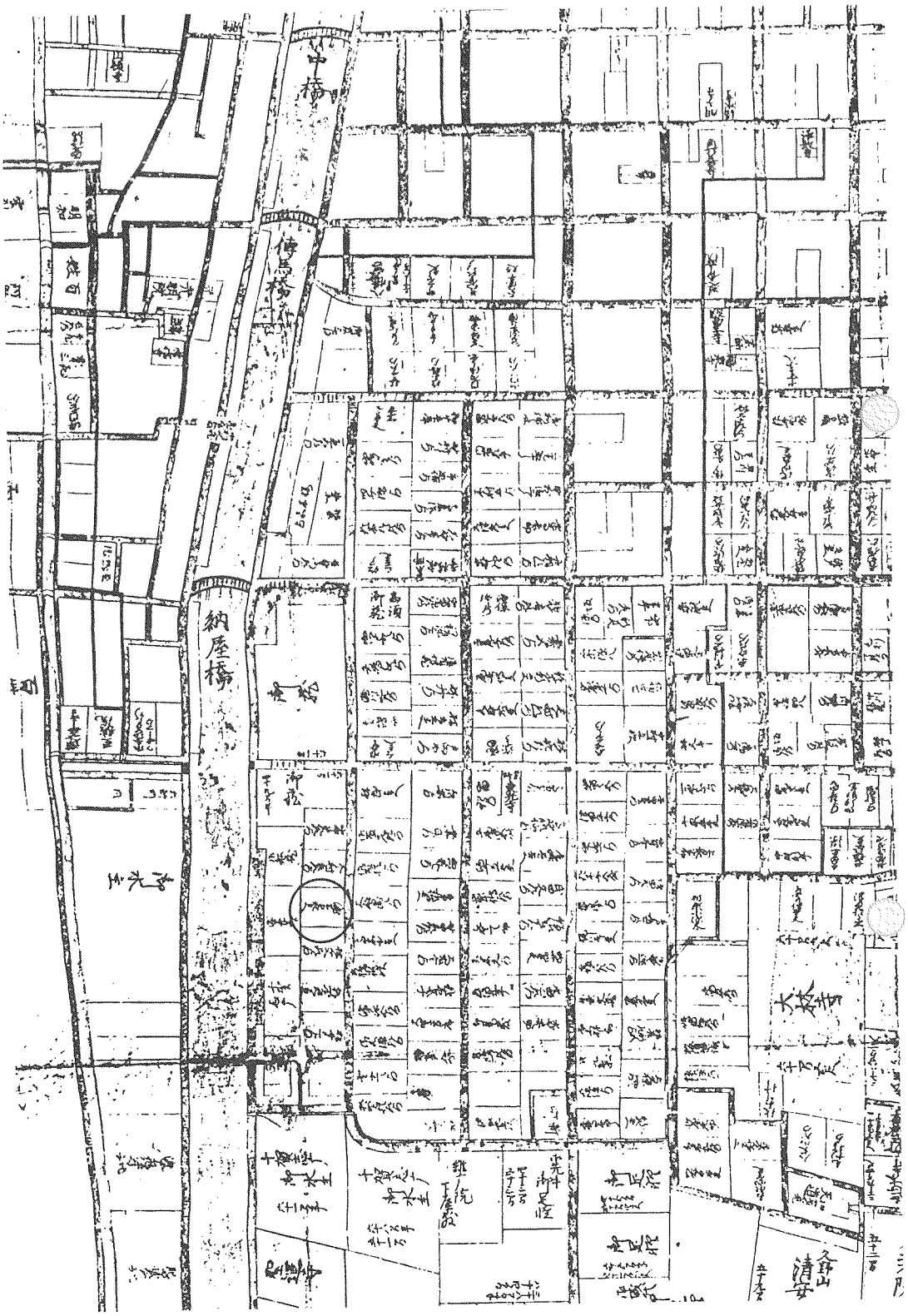
ところで本遺跡の名称となった「竪三蔵通」は、錦通から若宮大通に至る南北道路であるが、江戸時代には三ッ蔵筋又は竪三蔵と呼ばれていた。この名称の由来は、広小路の南に尾張藩の御蔵があったところからきている。すなわちこの御蔵は福島正則が清洲城へ入城した時に、城内に長さ30間の米蔵を3棟建てたことに始まり、松平忠吉が城主となった頃これを三ッ蔵と呼んだらしい。慶長遷府、いわゆる清洲越えとなり名古屋の地へ数十の蔵を建ててもなお昔通り三ッ蔵と呼ばれ続けた。明治時代になり御蔵は取り壊されたが、東西道路である三蔵通と共にその名を今日に残しているのである。

城下町割図の「天明年間名古屋市中支配分図」や「尾府全図」を見ると、本遺跡の範囲は武家屋敷が建ち並んでいたようである。延享3年（1746年）には御蔵の南側へ武家屋敷を取り壊して御普請方役所が建てられた。また、御普請方役所と天王社（洲崎神社）の間は船奉行千賀氏邸があった。千賀氏は知多郡師崎の出身で、天文年間、重親の代に初めて家康につき、師崎に住んで船奉行を勤め、三州の海上警備にあたった。以来、長久手の戦、小田原征伐、文禄の役、関ヶ原の戦等で戦功を上げ、江戸時代尾張徳川家の船奉行を務めた。南隣の天王社は、もと地神（石神）を祀る石神神社（旧村社）と素戔嗚尊を祀り広井天王、牛頭天王と呼ばれた洲崎神社（旧郷社）の2社あった。名古屋城築城以前は、現在の栄1丁目一帯が社地であったのが、築城後武家屋敷となり現在の社地に狭まったようである。

天王崎の南側は東から西に抜ける谷となっており、戦前まで小河川（紫川）が流れ竹藪となっていた。この川は戦災復興計画により埋め立てられ、若宮大通となっている。現在道路中央部で名古屋高速道路1号線の建設が進んでいる。昭和57年、日本電信電話公社と中部電力の洞道工事の際遺物が発見されたため、旧紫川遺跡として調査を行なった。以後高速道路建設に伴って3度調査を行なったが、この結果川岸の遺物包含層からは縄文早期から江戸時代の遺物が、川底からは主に江戸時代の陶磁器が多量に出土した。これらの多量の出土遺物の存在により、北側の台地すなわち竪三蔵通遺跡や白川公園遺跡に同時期の遺構が埋っている可能性が高いことは容易に推定できるようになった。那古野台地で最も標高の高くなる大須2丁目には、那古野山古墳、浅間神社古墳、日出神社古墳があり、少し離れて大須二子山古墳があった。竪三蔵通遺跡とは紫川の流れる谷筋でつながっておりまた那古野山古墳や大須二子山古墳の築造時期は5世紀後半～6世紀初頭と推定され、そして本遺跡には同時期頃の住居跡があることから、古墳と集落の関係を知る上でも本遺跡の内容には今後注意する必要があろう。



第2図　竪三蔵通遺跡と周辺の遺跡



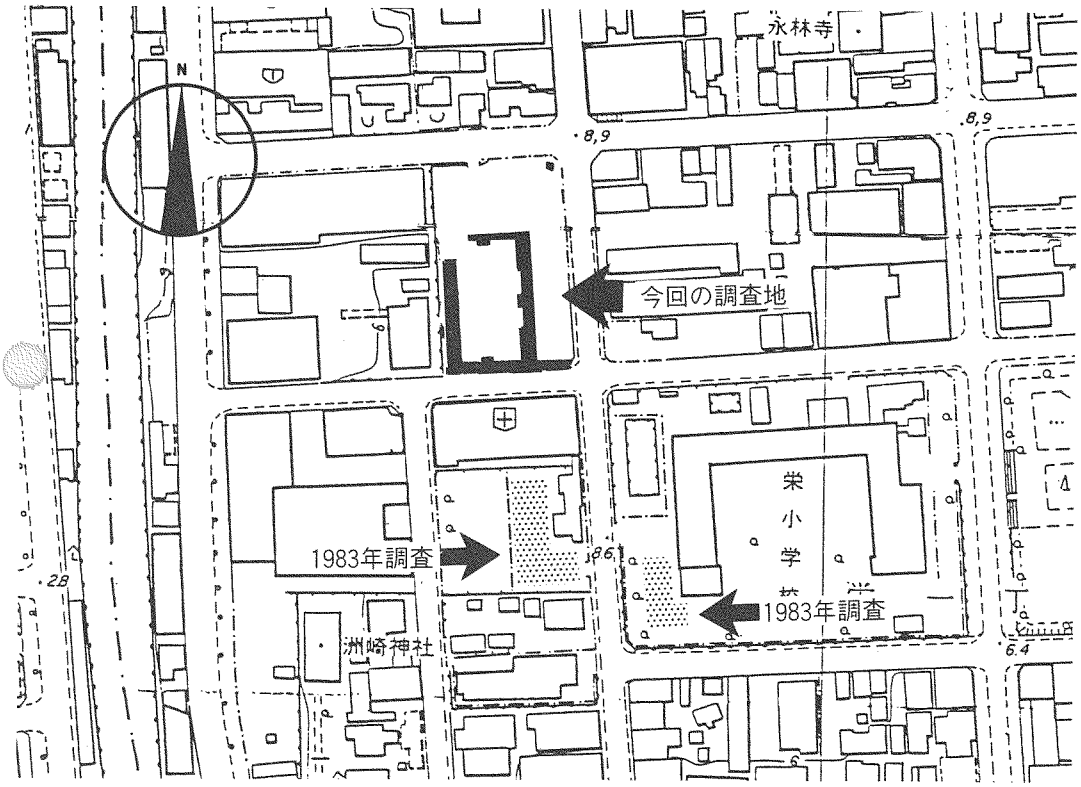
第３図　尾府名古屋図（宝永６年）　蓬左文庫所蔵複製より

Ⅱ．調査に至る経過

中区栄１丁目の堀川沿いの一帯は、大正年間に日本郵船株式会社が取得し、戦後その用地管理のため郵船興業株式会社を設立した。

今回、所有地の一部である当地に倉庫建設を計画したため設計事務所、ゼネコンなど、数社が文化課を訪れ、当地が埋蔵文化財包蔵地であることが確認された。

昭和59年９月、㈱郵船興業が来課し、倉庫建設計画に伴う対応について協議した。とりあえず試掘調査の実施について合意した。昭和59年11月30日付で依頼があり、昭和60年２月14、15日に実施した。３月に入り発掘調査について協議し、３月６日付で発掘届、発掘通知を受領した。その後、８月28日に契約を締結し、９月10日より発掘調査を実施する運びとなった。



名古屋都市計画基本図より

第４図　調査区位置図

Ⅲ．調査の経過

発掘調査は昭和60年９月10日に着手した。調査は倉庫建設に伴う事前調査であるが、遺構の破壊を最小限に抑えるために基礎工事部分に限り行なった。そのため調査区の設定にあたり、工事施工部分とのずれを防ぐために、倉庫の設計者である㈱白井設計に依頼して事前に施工位置を地面上に標示していただいた。この標示線に沿ってアスファルトカッターで切込みを入れ、その後 0.4㎥バックホウを使い表土掘削を開始した。まず西側調査区（西トレンチ）西北隅より始めたが、北端から南へ10m 程までは地表面から約 2.4m 下まで瓦礫が堆積しており、遺構は破壊されていた。北壁、西壁、東壁の土層状況から攪乱はさらに広がっているようだった。掘削したまま放置しておくことは、すぐ西側が２ｍ以の崖になっており、擁壁が崩壊する危険が考えられたため直ちに埋戻した。この攪乱部分より南側は茶褐色砂シルト質土の遺物包含層が良好に残存していた。遺物包含層と表土層は、土質、色調が似た土であったため若干遺物包含層を削平した嫌いがある。表土掘削は西トレンチの後、南側（南トレンチ）、東側（東トレンチ）、北側（北トレンチ）、広告塔設置区の順で進めた。東、北トレンチ、広告塔設置区は西トレンチ同様茶褐色砂シルト質土遺物包含層が良好に残存していた。南トレンチは南側を公道と接し、中央付近が旧駐車場の出入口となっていたため遺物包含層の大部分は削られており、すぐ地山となる状況であった。表土除去後、５ｍ方眼のグリッドを設定した。設定の基準は調査区が前述のように工事施工範囲に限られていたため、この施工範囲すなわち調査区に直交する形で設定することにした。この調査区の南トレンチ北側のラインに平行となる任意の点Ｐ１とＰ２を基線として北へ90°振り、点Ｐ３を設けた。そしてＰ２がＢＯポイントとなる様に、南から北に各０、１、２…、西から東にＡ、Ｂ、Ｃ…とし、グリッド(Ｇｒ.)番号は西北角のポイントで呼ぶことにした。ただし調査の都合上一部変更した。広告塔設置区はＨ９Ｇｒ.とした。

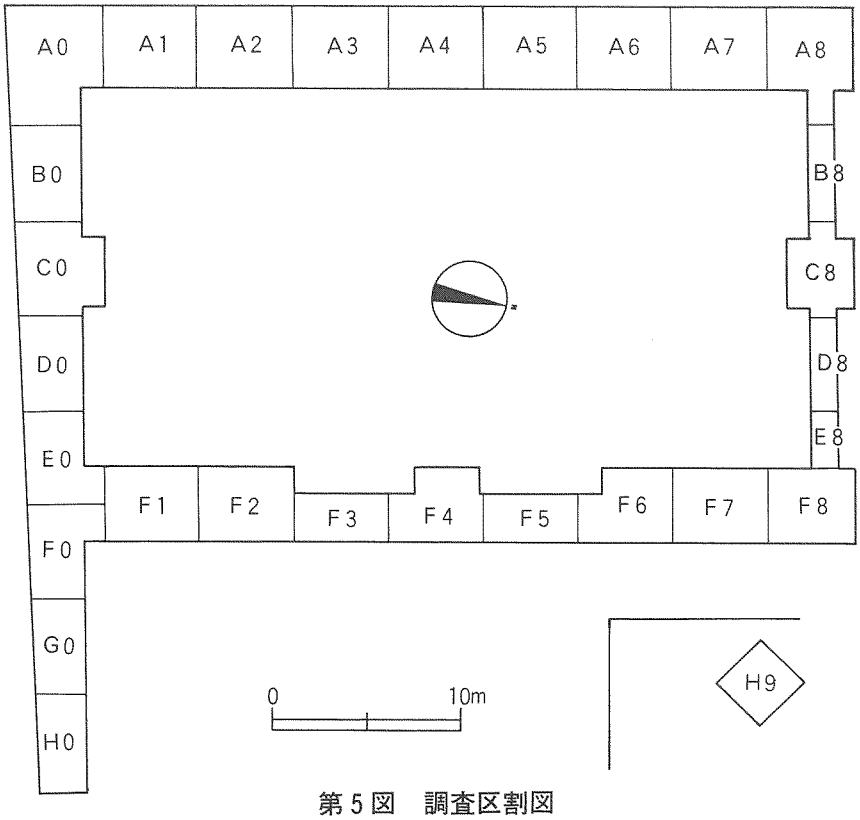
９月17日から東、西、北トレンチの茶褐色砂シルト質土の遺物包含層の掘削を開始した。調査はグリッドごとに順次掘削していった。掘削するペースは速く翌日には一部遺構検出に入るところとなった。この茶褐色砂シルト質土は砂質が強い土質で、出土遺物は古墳時代から近世までのものを含んでいることから近世の遺物包含層と考えられた。この茶褐色砂シルト質土を埋土とする遺構は、下層の遺物包含層である黒褐色砂シルト質土上面で検出した。検出した遺構や攪乱坑は遺構略図と番号を記録した後、攪乱坑から掘削を始めた。20日からいよいよ遺構掘削に入った。遺構にはピット、土坑、溝等があった。北トレンチで検出したピットは、柱が残り明らかに柱穴と確認できた例であるが、多くはその形状から柱穴と推測するに止った。時期については、出土遺物や埋土の土質からそのほとんどが

江戸時代のものと思われた。26日までに遺構掘削を終了し、27日に調査区南側の岡山病院と西側の東海電気工事健康保健組合の屋上をお借りして写真撮影を行なった。また27日から南トレンチの遺物包含層掘削、遺構検出に入り、東、西、北トレンチの黒褐色砂シルト質土遺物包含層を掘削するのに先立っては、上層遺構の記録をとるため西、東、北トレンチの順で平板測量を行なった。平板測量の済んだトレンチから遺物包含層掘削に入った。遺物包含層掘削のペースはやはり速く、包含層掘削、遺構検出が進むにつれ上層遺構の数倍の遺構があらわれてきた。西トレンチでは住居跡２軒を検出した(ＳＢ５、ＳＢ６)。どちらも周壁溝のみの検出で壁の立ち上がりは認められなかった。ＳＢ５はＳＢ６の内側で検出されたが、周壁溝は重複していなかったため前後関係はわからなかった。また可能性として二重の周溝をもつ一軒の住居の考えも残された。周壁溝からは内側に向かい溝が延びていた。こうした溝は市内では南区桜本町遺跡の古墳時代住居跡でも検出されており、同種のものと思われた。住居跡内側には多くのピットや土坑があり、床面遺物を抽出することは困難であったが、ただ１つＳＢ５東側の周壁溝埋土上面から住居内側にかけて土師器甕が割れた状態で出土し、ＳＢ５の時期を決める手がかりとなると思われた。これらの住居跡の柱穴は、前述のように周辺に多くあけられたピットに惑わされ、判断し難かったが、幸い写真撮影をする段階になり西側ビル屋上より観察検討したところ、位置的にも形状的にもほぼ妥当と思われる柱穴を見つけることができた。このため一軒の住居の可能性はなくなり、２軒の住居跡の重複していることが明らかとなった。東トレンチでは住居跡３軒を検出した(ＳＢ１～３)。ＳＢ１はＦ３Ｇｒ.の包含層を掘削していったところ、北側の地山のレベルが高いことがわかり、住居跡の壁の立ち上がりが残っている可能性があったので、遺物の取り上げは慎重に行なった。やはり地山の一段下がったところで溝を検出したため、住居跡と断定した。ただし南側は壊されており調査範囲も狭かったため、柱穴等は検出することができなかった。遺物は土師器の破片が少量出土したに過ぎなかったが、高坏や壺等から古墳時代中期(神明式)頃と思われた。ＳＢ２はＦ６Ｇｒ.で検出した。住居跡の東側では若干の壁の立ち上がりが認められたが、北、南側では周壁溝のみ検出した。Ｆ８Ｇｒ.でも住居跡の周溝を検出した。まず南北方向に１条の溝を検出した。この溝が住居跡の周壁溝であろうことは容易に推定することができたが、周辺の攪乱坑やピットに阻まれて住居跡のプ

写真１　空撮風景

ランは確認できなかった。ところが遺構の掘削を進めていくうちに、Ｆ７Ｇｒ.の中の細長いピットがこの住居跡の東西方向の周溝の一部であることがわかり、住居跡ＳＢ３のプランの一部が明らかとなった。南トレンチではピットの他、井戸３基、溝等を検出した。井戸は安全対策上地山面より１～1.5m 掘削したのみで埋没時期等は明らかに出来なかった。ＨＯＧｒ.で検出した溝は、幅も広く断面逆台形をしており、検出長がわずかであり濠とするには早計かもしれないが、先年調査した南側の岡山病院地内で検出された濠が同様の規模、形状であるため、岡山病院地点の続きと推定した。この溝（濠）は北へと続くと考えられるが、偶然溝と平行してある東トレンチでは検出されなかったので、すぐ西へ曲がることはないようだが、北へさらに続くのか、東へ曲がるのかは今回確認できなかった。ただ広告塔設置区での土層堆積状況は異なる様相を示しており、ここまでは延びないと思われる。

10月23日までに遺構掘削を終了し、25日に遺構平面図化のため空中写真撮影を実施した。11月９日には、出土した遺構、遺物を見学してもらうため市民見学会を開催した。天候にも恵まれ 250人を越す見学者が訪れた。15日に県教委文化財課係員の終了確認を得て現地調査を無事終了した。以後翌年３月末まで概要報告書作成のための遺物整理を行なった。



第５図　調査区割図

Ⅳ．調査の概要

１．遺　　構

調査地の基本的な土層堆積状況は、上位より盛土、旧表土、茶褐色砂シルト質土、黒褐色砂シルト質土で、橙黄色シルト質土の地山に至る。遺構は黒褐色砂シルト質土上面で検出できた上層遺構と、地山面で検出できた下層遺構がある。上層遺構にはピット（小穴）、柱穴、土坑、溝、井戸等がある。これらの年代は出土遺物から江戸時代から明治時代と考えられる。下層遺構にはピット、土坑、溝、竪穴住居等がある。これらの年代は出土遺物から古墳時代から中世と考えられる。以下主要な遺構の説明を中心に時代順に概略を述べる。

１．古墳時代から奈良時代

住居跡６軒を検出した。検出した時の状況は前章で述べた通りである。他に北トレンチで１軒、南トレンチで１軒それらしい遺構を検出したが、確証に欠けるため除いた。土坑、ピットは数多いが、性格等はわからない。ピットの中には掘立柱建物の柱穴があると思われるが調査範囲が狭いため明らかにできなかった。

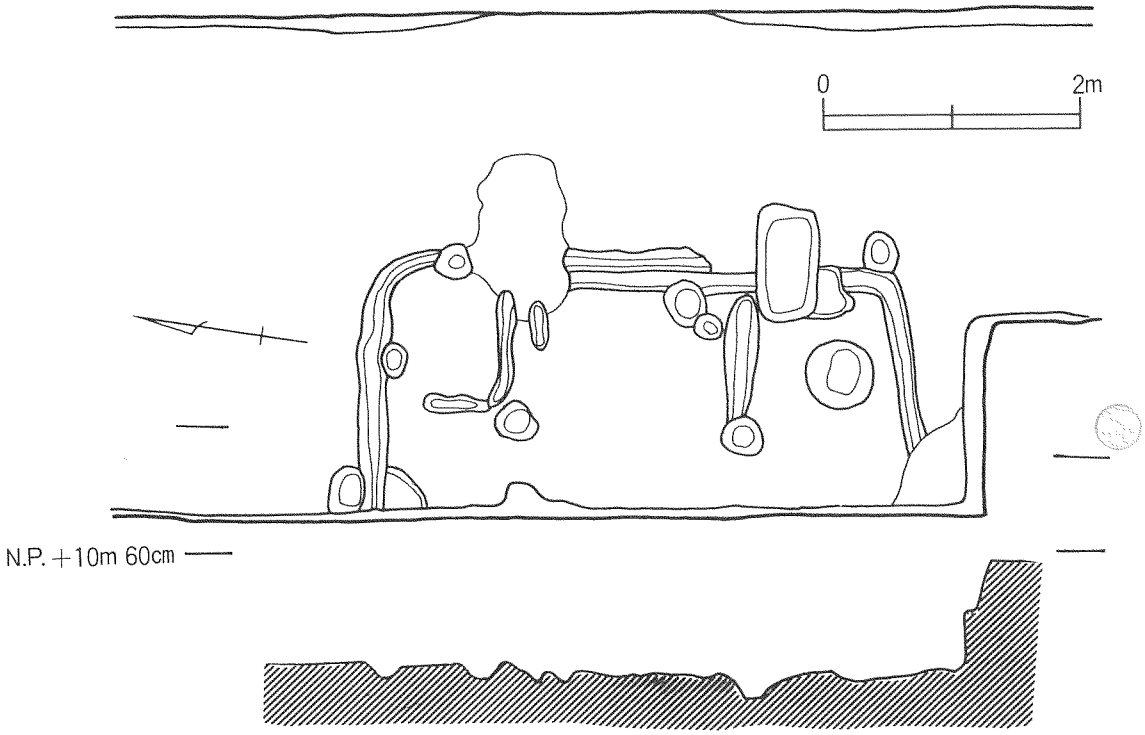
竪穴住居ＳＢ１はＦ３Ｇｒ.で北側の周壁と床の一部を検出した。平面形態、規模、柱穴は不明である。床面で黄色土と黒色土の混じった土が認められた。床面を整地し貼床したものと思われた。周壁は床面（地山面）から約15cm残っていた。周壁溝は幅約15cm、深さ約３cmで、周壁溝より住居内側に幅約15cm、深さ約８cmの溝が延びる。埋土中より土師器（壺、甕、高坏）が出土したことにより、時期は古墳時代中期の神明式と考えられる。

ＳＢ２はＦ６・Ｆ７Ｇｒ.で概ね東半分を検出した。平面形態は周壁溝の形より隅丸方形住居と推定される。規模は東西２ｍ以上、南北約4.3mあり、柱穴は２穴検出した（Ｐ３、Ｐ34）。Ｐ３は約30×30cm、深さ約30cm、Ｐ34は約30×30cm、深さ約45cmを測る。柱間は約1.8ｍ。周壁は東側中央付近で若干残っていた。周壁溝は幅約20cm、深さ約10cmで、各柱穴と東側周壁溝との間に幅10～20cm、深さ約10cmの溝がある。時期は住居内埋土及び周溝埋土中より土師器の細片が少量出土したに過ぎないため不明である。

ＳＢ３はＦ８Ｇｒ.で周壁溝２辺を検出した。平面形態は不明である。規模は東西3.6m以上、南北 3.7m以上を測る。約30×30cm、深さ約30cmを測るＰ８が柱穴の１つと考えられる。他の住居跡と若干方向が異なっている。

ＳＢ４はＥ８Ｇｒ.で南辺周壁溝を検出した。平面形態は隅丸方形住居と思われる。周壁溝は幅約20cm、深さ約10cmを測る。

ＳＢ５はＡ３・Ａ４Ｇｒ.で西辺を除く３辺の周壁溝と２柱穴を検出した。平面形態は方



第６図　２号住居跡平面図・断面図

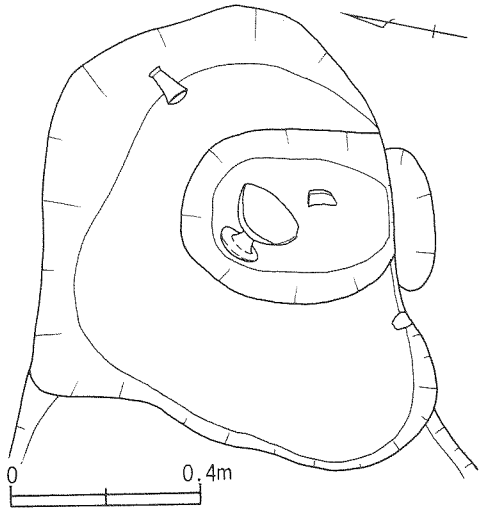


写真２　同出土状況

第７図　ＦＩＧｒ．土坑Ｋ７高坏出土状態

形住居と思われる。規模は東西2.8m 以上、南北約4.3m を測る。柱穴Ｐ62は約25×20cm、深さ約20cm、Ｐ９は約25×25cm、深さ約15cm、柱間は約1.95m を測る。周壁溝は幅10～20cm、深さ約５cm、周壁溝内に小ピット列を有する。住居内に土坑Ｋ５（約90×90cm、深さ約30cm）、土坑Ｋ６（約100×80cm、深さ約15cm）、土坑Ｋ８（約100×80cm、深さ約30cm）があるがこの住居に伴なうものか、ＳＢ６に伴なうものかあるいは単独のものか明らかにできなかった。遺物は周壁溝埋土上面より土師器甕がつぶれた状態で出土した。この位置はＳＢ６の柱穴Ｐ28と重複する部分であることから、この土師器はＳＢ５に伴なう可能性があり、そうするとＳＢ５はＳＢ６より新しい時期といえよう。

ＳＢ６はＡ３・Ａ４Ｇｒ.でＳＢ５をとり囲む形で周壁溝を検出した。平面形態は方形住と思われる。規模は東西3.8m 以上、南北約７ｍを計る。検出した住居の中では最も大きなものである。柱穴は２穴検出した（Ｐ29、Ｐ28）。Ｐ29は約40×40cm、深さ約40cm、Ｐ28は約45×45cm、深さ約50cm、柱間は約3.9m を測る。周壁溝は幅20～25cm、深さ約10cmで、周壁溝南辺より住居内側へ幅約25cm、深さ約10cmの溝が延びる。周壁溝内に小ピットを有するが、岡山病院地点検出のような２列にはなっていなかった。また周溝がとぎれている部分からも小ピットが検出された。時期は上述のようにＳＢ５に先行して建てられたと考えられる。

竪穴住居以外で比較的残りの良い遺物を出土した遺構として、Ｆ１Ｇｒ.のＫ７（約 100×90cm、深さ約25cm、土師器高坏出土）、Ｆ５Ｇｒ.のＰ13（約35×30cm、深さ約25cm、須恵器坏身出土）、Ｆ５Ｇｒ.のＰ22（約70×55cm、深さ約30cm、土師器高坏出土）がある。またＡ５Ｇｒ.のＫ３、Ｋ14、Ｋ16は近接して検出された遺構であるが、いずれも奈良時代の遺物がまとまって出土した。

２．平安時代から中世

Ａ１Ｇｒ.のＰ22（深さ約14cm）より山茶碗の細片が出土した程度で明確に判断できる遺構は少ないようである。

３．近世から近代

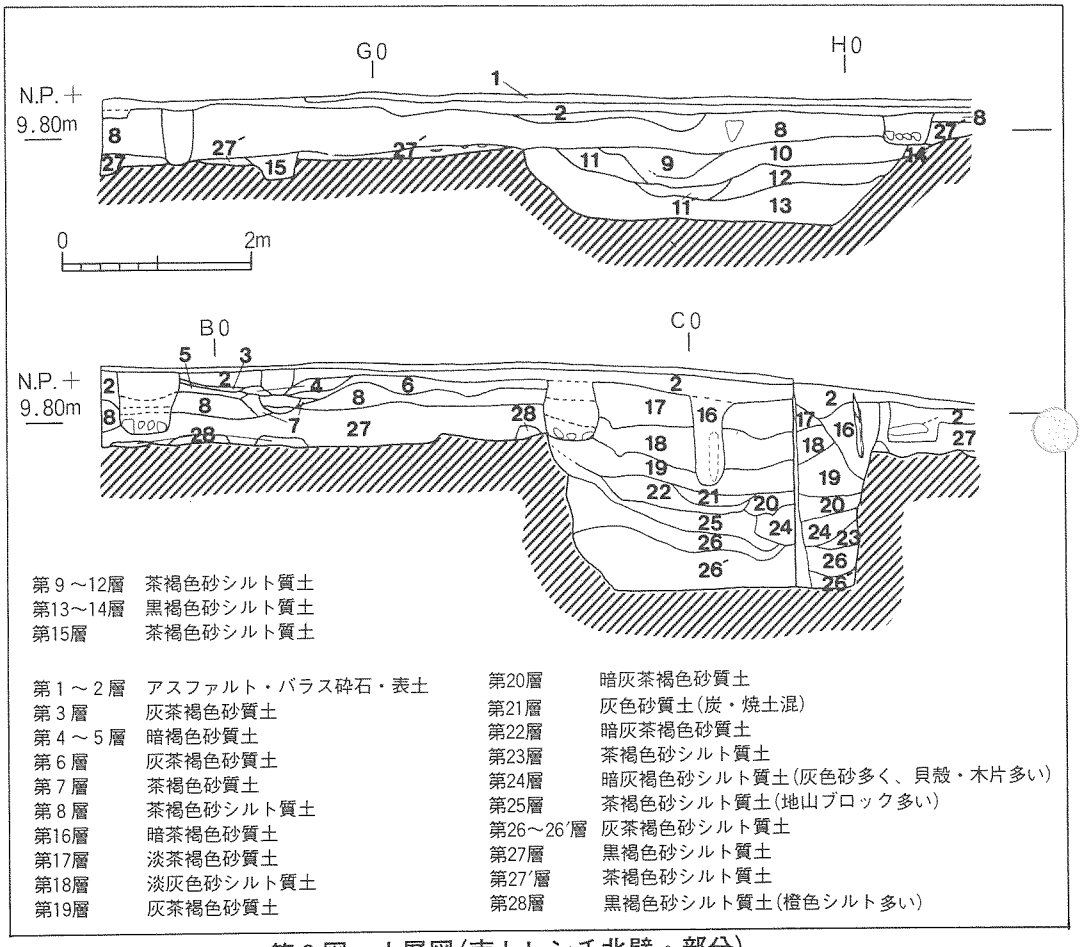
建物として掘立柱建物、礎石建物がある。北トレンチで検出した柱穴列は、長方形の掘方で柱の遺存したものが多く、１棟以上の建物があったと思われる。Ｅ８Ｇｒ.のＫ３のように掘方壁に沿って平瓦を立てたものもあった。北トレンチの建物の時期として、Ｄ8Ｇｒ.のＫ７から出土した「・学校□」と書かれた磁器碗から明治になってこの地へ建てられた医学校に関わるものと考えられる。柱穴ではないが、Ｆ５Ｇｒ.で検出した土坑Ｋ６は、底に直径15cm程の平たい石を４個配置し、その上に井の字状に木材を組んで置いてあった。東側の材は攪乱を受けたためすでになくなっていたが、残っていた材の端部上面にはほぞ

穴状の切り込みが穿たれており、また材が交差する部分には方形の穴があいていた。

土坑はピットと共に多くあるが、遺物を多く出土したものとしてＦ１・Ｆ２Gr. のＫ21（約1.1×1.0m、深さ約40cm）やＢＯ・ＣＯGr. のＫ４（約3.2×1.2m以上、深さ約１m）、Ａ１Gr. のＫ２（約2.3×1.5m、深さ約80cm）等がある。

溝はＦ１Gr. Ｄ１（幅約1.45m、深さ約70cm）は東西方向のもの。ＧＯ・ＨＯGr. Ｄ１（幅約3.6m、深さ約70cm）は幅が広く南北方向のもので、前述したように岡山病院地点の濠の続きと思われる。

井戸は３基ある。いずれも素掘である。ＡＯGr. のＥ１（径約1.0×1.1m）、ＣＯGr. のＥ２（径約1.2×1.2m）、ＦＯGr. のＥ３（径約1.25×1.25m）は東西にほぼ一直線に並んでいる。間隔はＥ１とＥ２間が約14.9m、Ｅ２とＥ３の間が約13.5mであった。ほぼ等間隔にあることから同時に機能していたと思われる。底まで掘り切らなかったため時期はわからないが、近世のものとすれば、武家屋敷あるいは御普請方役所のものとなり、近代のものとすれば医学校のものとなる。



第８図　土層図（南トレンチ北壁・部分）

2．遺　　物

今回の調査で出土した遺物は、弥生時代から明治時代にわたる土器、陶磁器、土製品、石製品、木製品、建築材等で、コンテナケースに約50箱分出土した。そのほとんどが土器、陶磁器である。

1．弥生時代（図四―５写真七―１～２）

後期後葉の欠山式土器の破片が若干だが出土した。また後期前葉の山中式の高坏脚部片と思われるものも１点ある（写真七―１右下）。

2．古墳時代（図四～五写真七～八）

土師器と須恵器がある。

土師器には壺、甕、高坏等がある。器形のわかるものは少なく、そのほとんどが１～３cm大の細片で、時期も決め難い。

前期は元屋敷式と思われる壺口縁部片（写真七―１左上）や高坏脚部片（写真七―２左）がある程度で量は少ない。

中期のものとして、１号住居跡出土土器が相当すると考えられる。壺、高坏、台付甕等がある。壺は小型壺で口径10.2cmを測る（図四―１）。高坏は稜をもち口縁部が外方へひらくものである。復元口径17.6cmで、外面をヨコナデする。高坏の形態をみると豊田市神明遺跡３号住居址や31号住居址のＢ類に似ており、５世紀後半頃の神明式か神明式よりあまり下がらない時期と考えられる（図四―３～４）。Ｃ８Gr. の包含層からは高坏脚部片（図四―７写真七―３）がＡ２Gr. のＫ５（図四―10写真七―５）やＦ２Gr. のＰ４（図四―11）からは高坏脚部片が出土している。坏部片は神明遺跡31号住居址Ａ類に、脚部片はＢ類もしくはＤ類に似たものである。

後期のものは、Ｆ５Gr. のＰ22の高坏やＦ１Gr. のＫ７の高坏がある。Ｐ22の高坏は坏のみ完存し、口径15.2cmを測る深い盌形をしている（図四―８写真七―４）。一方Ｋ７の高坏はほぼ完存して出土したもので、深い坏部に短かい脚をもつ。口径15.2cmを測り坏部には口縁部と底部を接合した痕跡が明瞭にみられる（図四―９写真七―７）。湖西市東笠子第30地点Ｆ６土坑出土のものに類似する。ただ年代として脚部が短かく裾もゆるやかに屈折していることから６世紀以降に下るものといえよう。

他にＡ２Gr. のＰ７より高坏（図四―６）、Ｆ２Gr. より小形壺（図四―12写真七―６）、Ａ４Gr. やＡ３Gr. からは台付甕（図四―15写真七―８）や甕（図四―13～14）が出土している。

須恵器は坏身、坏蓋、高坏、甕等がある。土師器に比べ量は少ないようである。

坏身は６世紀前半～７世紀後半のものがある。図五―１は口径10.3cm、高さ4.7cmを測る。

削りの方向は順まわり。底部内面に仕上げナデがみられる（写真八―３）。図五―２は復元口径12.4cmを測る。削りの方向は順まわり。図五―３は口径8.6cm、高さ3.4cmの小型品である。底部外面はヘラケズリしているが摩滅しているため削りの方向は不明である。橙黄色を呈する（写真八―１）。１はＦ８Gr.、２はＡ３Gr. の包含層、３はＦ５Gr. のＰ13出土。

坏蓋は６世紀初頭～７世紀後半のものがある。図五―４は口径９cm、高さ 2.6cmの小型品である。削りの方向は逆まわり。Ｅ０Gr. のＰ33出土（写真八―２）。他にかえりを有するものが数点ある。

高坏は６世紀代のものがある。いずれも有蓋高坏である。図五―６は削りの方向は順まわり。D8Gr. の包含層出土（写真八―４）。図五―５は底部内面に仕上げナデがみられる。Ａ３Gr. の包含層出土（写真八―６）。

甕はＥ８Gr. の包含層出土のものは、体部外面にタタキ目文を残す。内面はナデている。５世紀末頃のものである（写真八―７）。他に白黄色を呈するものもある（図五―11）。

３．奈良時代（図五～六写真九）

須恵器は坏身、坏蓋、盤、硯等がある。前述したようにＡ５Gr. の遺構より坏蓋、盤等まとまって出土した。

坏身は無台のものと有台のものがある。無台坏身は底部に回転糸切り痕が残るもの（図五―18～19）とヘラケズリのもの（図五―17）がある。19はＡ５Gr. のＫ14から出土した。

坏蓋はＡ５Gr. のＫ３、Ｋ16等で出土した（図五―12～15）。12は宝珠形つまみが頂部につく（写真九―１）。14は扁平なつまみがつくがゆがんでいる（写真九―２）。12は８世紀前半、14、15は８世紀後半のものと考えられる。

盤はＡ５Gr. のＫ14等で出土した（図六―１～３写真九―３）。１は底部に糸切痕が残る。いずれも８世紀後半のものと考えられる。

４．平安時代（図六写真九）

須恵器は瓶等、灰釉陶器は碗、段皿等がある。量的には少ない。

瓶は口縁部を欠失する。厚い底部に体部を接合して作り上げる。底部に糸切痕が残る。（図六―５写真九―７）。

碗は底部ヘラケズリ、角高台がつき、体部内面全体に施釉されていることから黒笹14号窯式のものである（図六―４）。瓶、碗ともＡ３Gr. のＫ３より出土した。

段皿は口縁の破片が２点ある（写真九―４）。左は段を削り出すことによりつくり、釉は漬け掛けである。

５．中　　世（図六写真九―５）

山茶碗、小皿がある。出土遺物の中ではこの時期のものが最も少なかった。小皿（図六

—6～7）のうち6は、口径8.4cm、高さ2.3cmで高台がつき、底部に糸切痕が残る。12世紀代のものである。

6．近　世（図六写真十～土）

陶器、磁器、土師器がある。陶器は碗、小皿、擂鉢、鉢、秉燭、蓋、銚子、水滴、土瓶等、磁器は皿等、土師器は土師皿、内耳鍋等がある。

上層の包含層や遺構から多くの陶磁器が出土しているが大部分未整理なため、主なものについて述べる。

F1・2Gr.の土坑K21からは完形品を含む多数の陶器等が出土した。褐釉天目碗（図六—8写真十—1）、刷毛塗碗（写真十—4右）、灰釉小皿、鉄釉鉢、片口鉢（写真十—7）、銚子（図六—13写真土—7）、擂鉢、内耳鍋等がある。17世紀～19世紀のものである。擂鉢は内面のおろし目がほとんど摩滅しており長い間使用された様子がうかがえる。

F4Gr.の溝D1からは16世紀末の鼠志野皿（図六—14写真十—5）、絵志野皿（図六—16）、17世紀代の天目碗（図六—9）の他土師皿（図六—18）等がある。この土師皿は口縁部に黒色の油煙状のものが付着しているが、全面についたものも何点かある。

焼塩壷は2点ある（図六—19写真土—1）。19は渡辺誠氏分類のA型、もう1つは器壁がはがれているがB型のものである。

7．近　代

体部に「・学校□」、「・院・」と書かれた磁器碗がある。

8．そ の 他（挿図10）

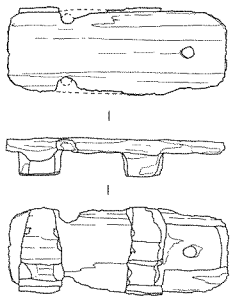
土錘（写真九—6）須恵質と土師質のものがある。1は重さ約40g。

陶丸（写真九—6右下）重さ約10g。

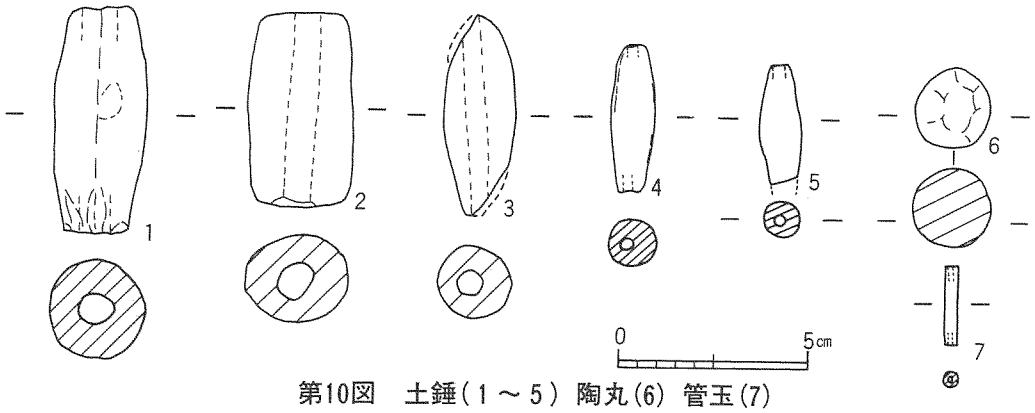
管玉（写真九—9右）長さ2.1cm、直径0.3cmで二方から穿孔する。

紡錘車（写真九—9左）断面台形で斜面及び底面に鋸歯文がめぐる。上面径1.8cm、底面径3.9cm、高さ1.5cm、孔径0.7cm、重さ約10g。滑石製と思われる。

他に砥石、下駄（挿図9）、土製人形（写真土—3）等がある。



第9図　下駄S＝1/8



第10図　土錘（1～5）陶丸（6）管玉（7）

V. ま と め

今回の調査は、倉庫建設に伴なう事前調査として約 490㎡を対象に実施した。調査対象が基礎工事部分に限られたにもかかわらず、弥生時代から江戸時代にわたる多くの遺構、遺物を得ることができ、竪三蔵通遺跡の内容を明らかにするための貴重な成果を上げた。その概要については第Ⅳ章で述べたとおりであるが、簡単にまとめておきたい。

1．当調査区は弥生後期から中世の遺物を含む下層包含層と、近世の遺物を含む上層包含層が良好に存在していた。竪三蔵通遺跡は都心部に位置し、江戸時代はともかく中世以前の遺跡の範囲は未確定である。今回の調査区内では遺物包含層は全域に認められたので、遺跡の北限はより北に求められる。

2．弥生時代後期山中式～欠山式土器が少量ではあるが出土した。竪三蔵通遺跡の南側に位置する旧紫川遺跡では欠山式土器の包含層があり、これらの生活跡は北側台地上に推定されてきたが、台地南縁のみでなく当調査区周辺にもその一画が存在する可能性が高まった。

3．今回6軒の住居跡を検出した。うち2軒は若干の埋土が認められ、他の4軒は周壁溝により確認した。埋土中から出土した土器により少なくとも1軒は古墳時代中期に比定してさしつかえないと思われる。また住居跡の形態の特徴として、間仕切溝状の溝をもつ住居跡があった。

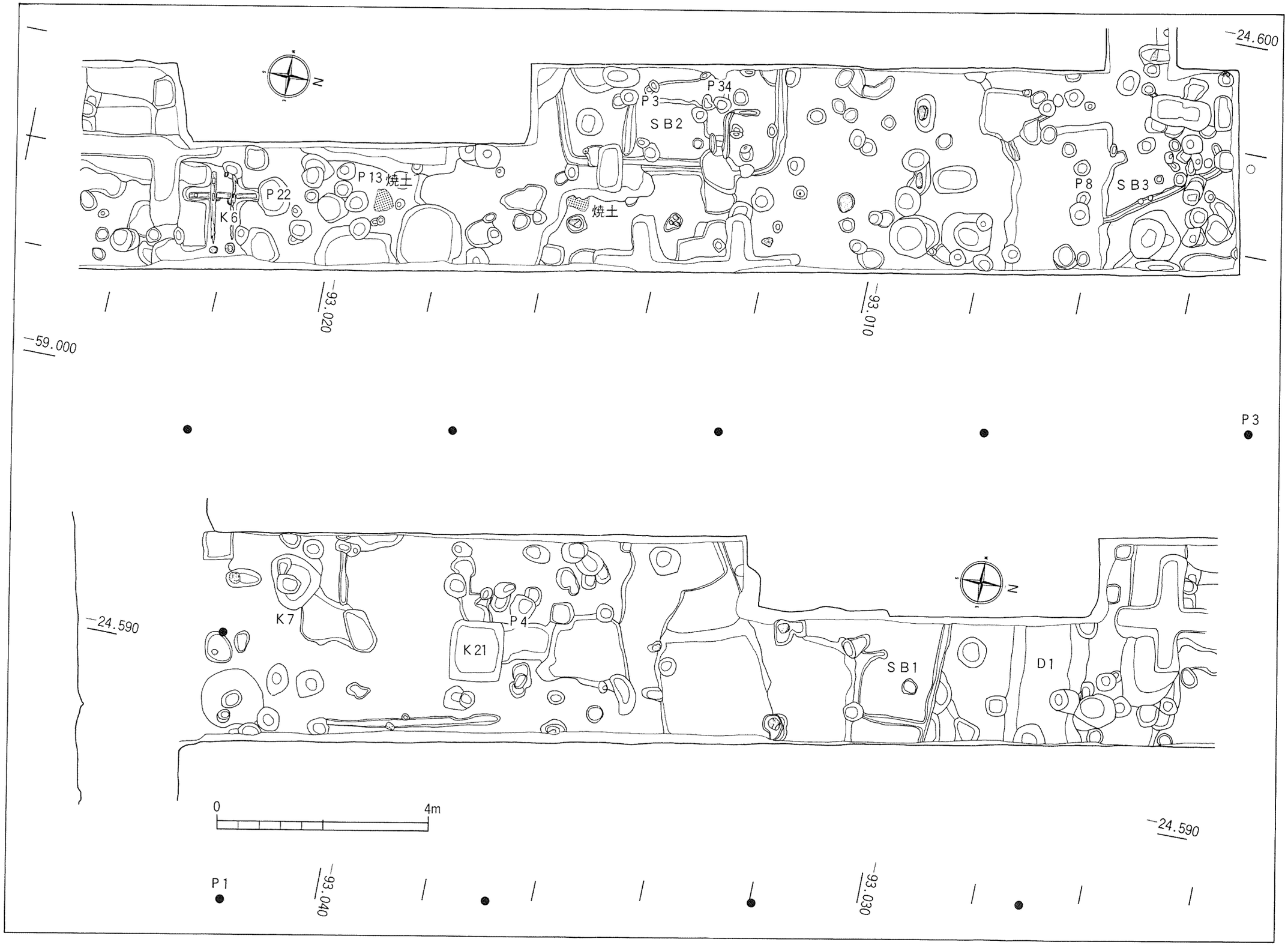
4．江戸時代の遺構も調査区全域で検出できた。絵図面をみるとこの地は武家屋敷、御普譜方役所であった地で、検出した遺構もそれらに関わる遺構であると考えられる。

5．出土遺物は古墳時代から奈良時代の土師器、須恵器と近世陶器が最も多く、平安時代から中世の遺物が少なかった。遺物の中では近世の焼塩壺が注意される。遺構の年代や性格を知る上で重要な資料である。

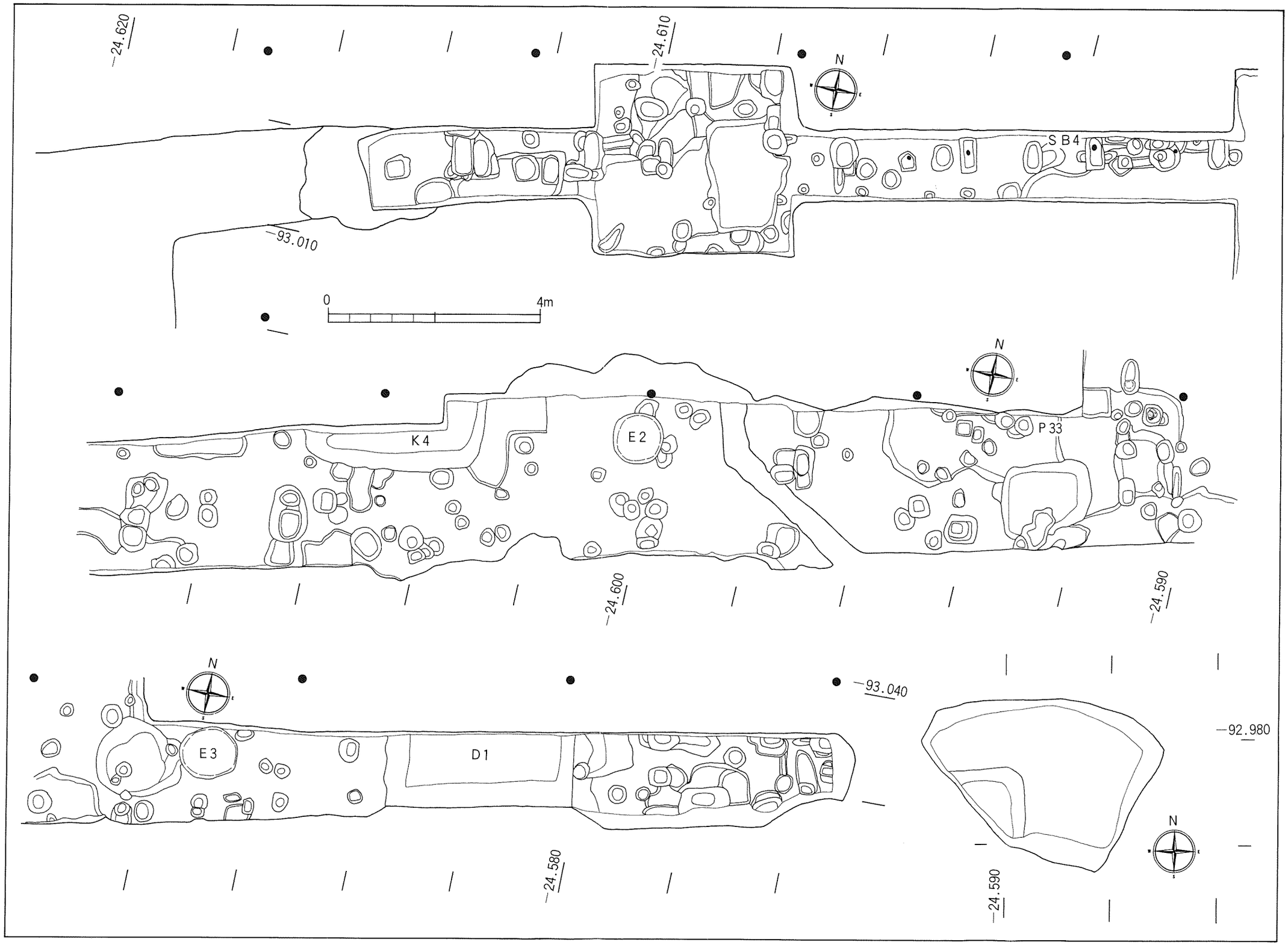
写真3　市民見学会風景

図　　版

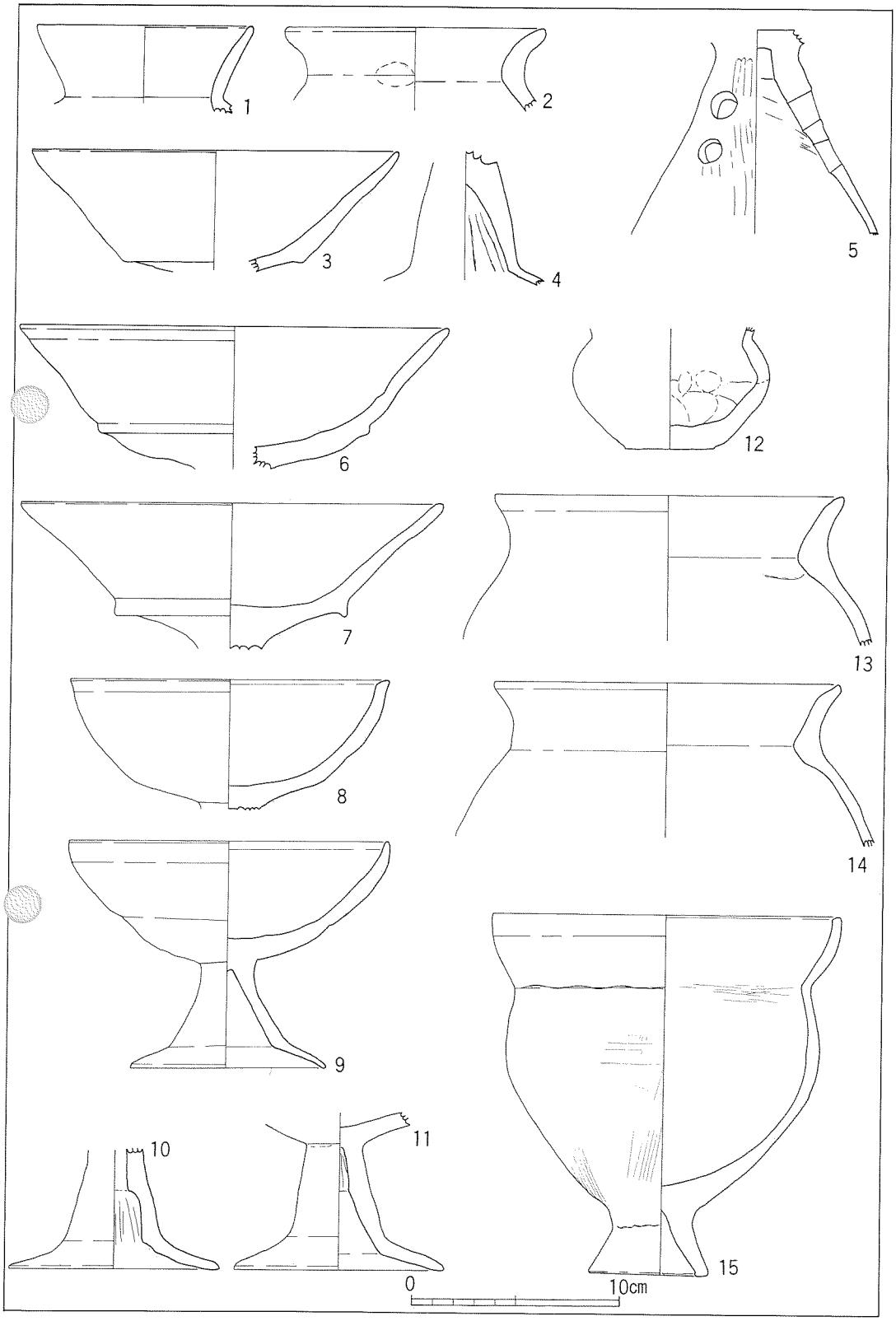
図版一　遺構平面図


-24.600
N
P 3
P 34
S B 2
P 13
焼土
P 22
K 6
焼土
P 8
S B 3
-93.020
-93.010
-59.000
P 3
-24.590
K 7
P 4
K 21
S B 1
D 1
N
0
4m
-24.590
P 1
-93.040
-93.030

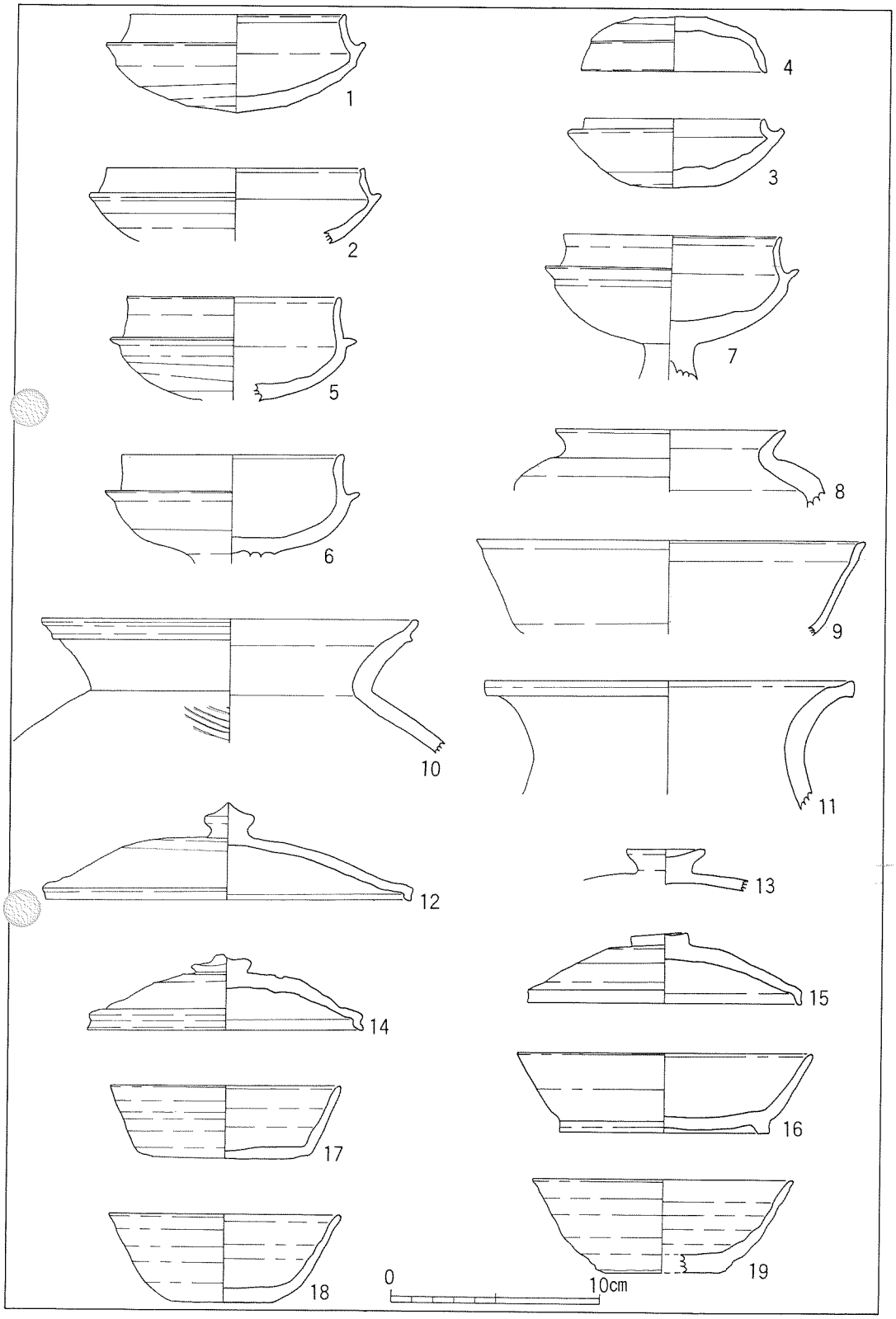
図版三　遺構平面図


24.620
24.610
N
SB4
93.010
0
4m
N
K4
E2
P33
24.600
24.590
N
93.040
92.980
E3
D1
24.580
24.590
N

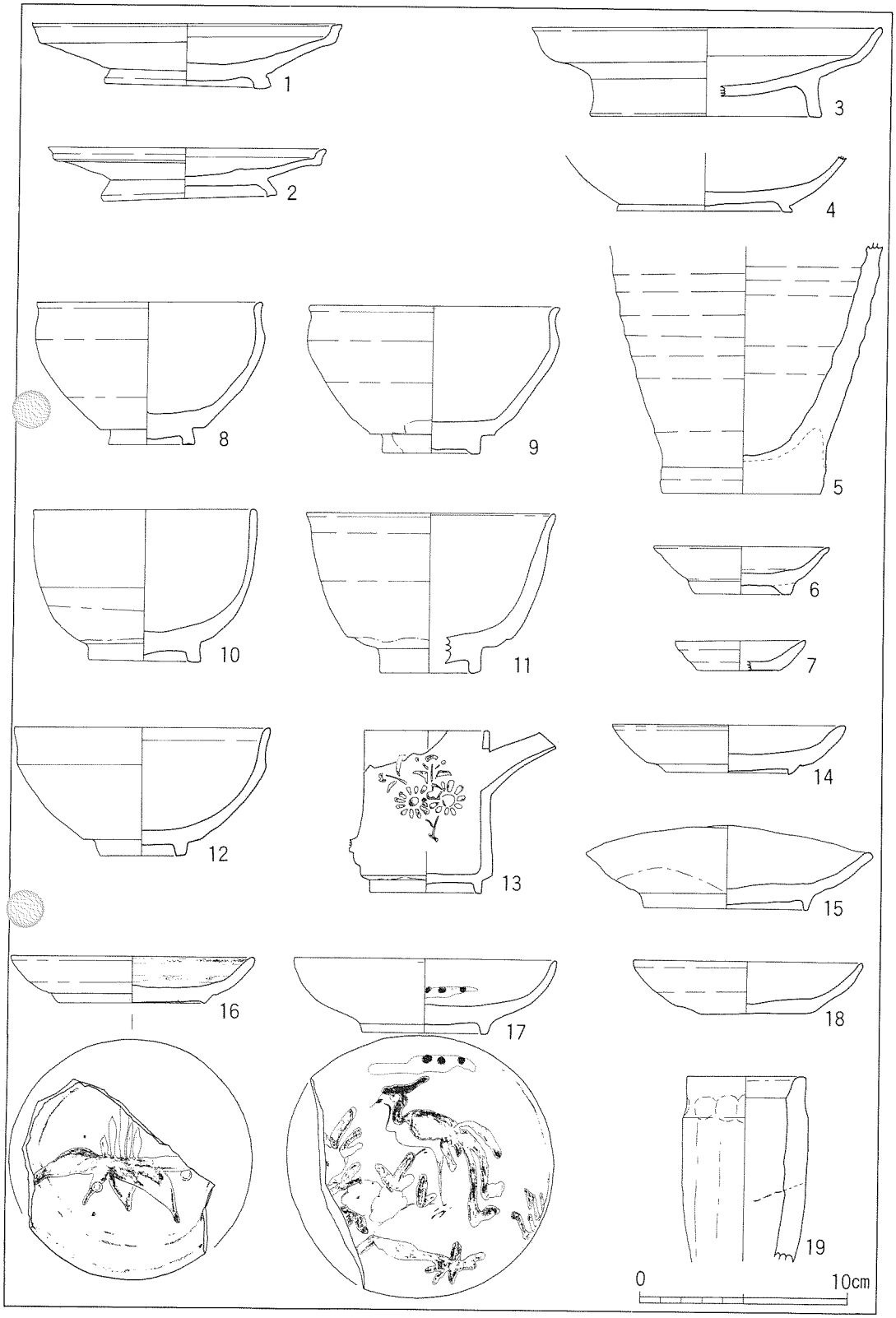
図版四　遺物実測図



図版五　遺物実測図



図版六　遺物実測図

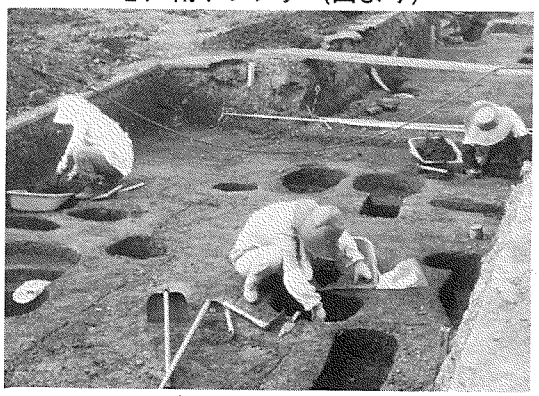


写真図版一（調査風景）

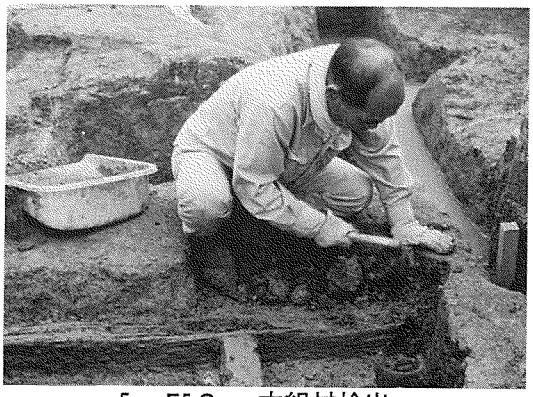
1．西トレンチ（南より）

2．南トレンチ（西より）

3．２号住居跡

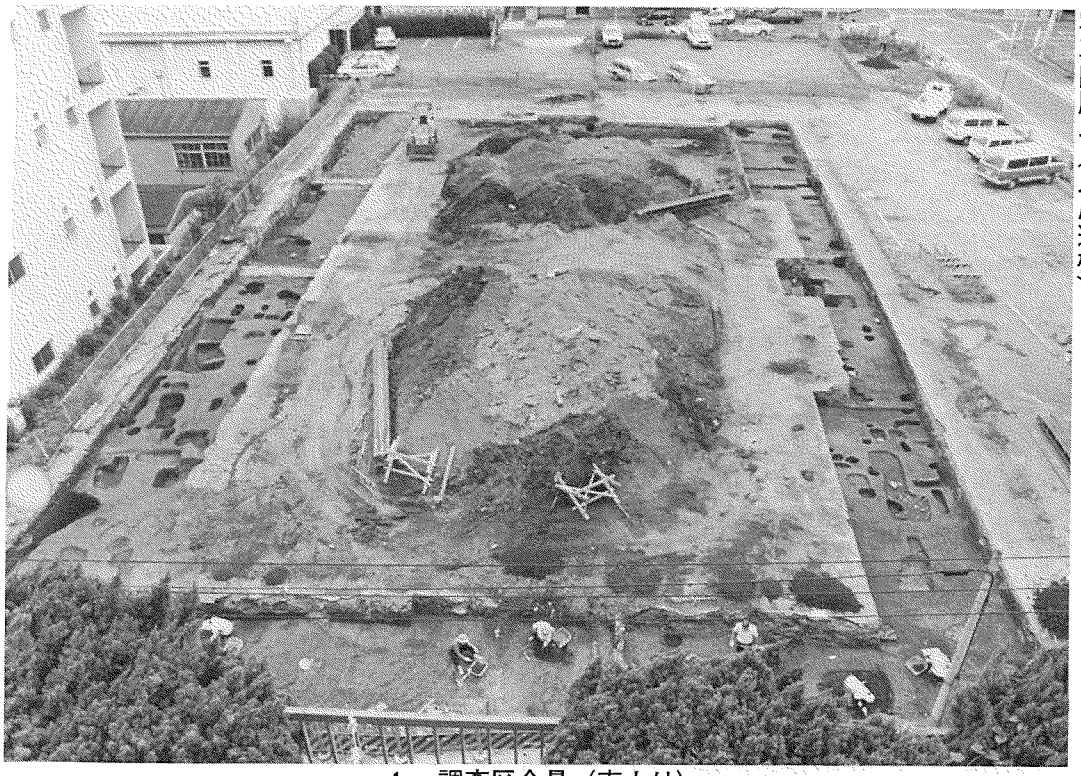


4．東トレンチ（南より）

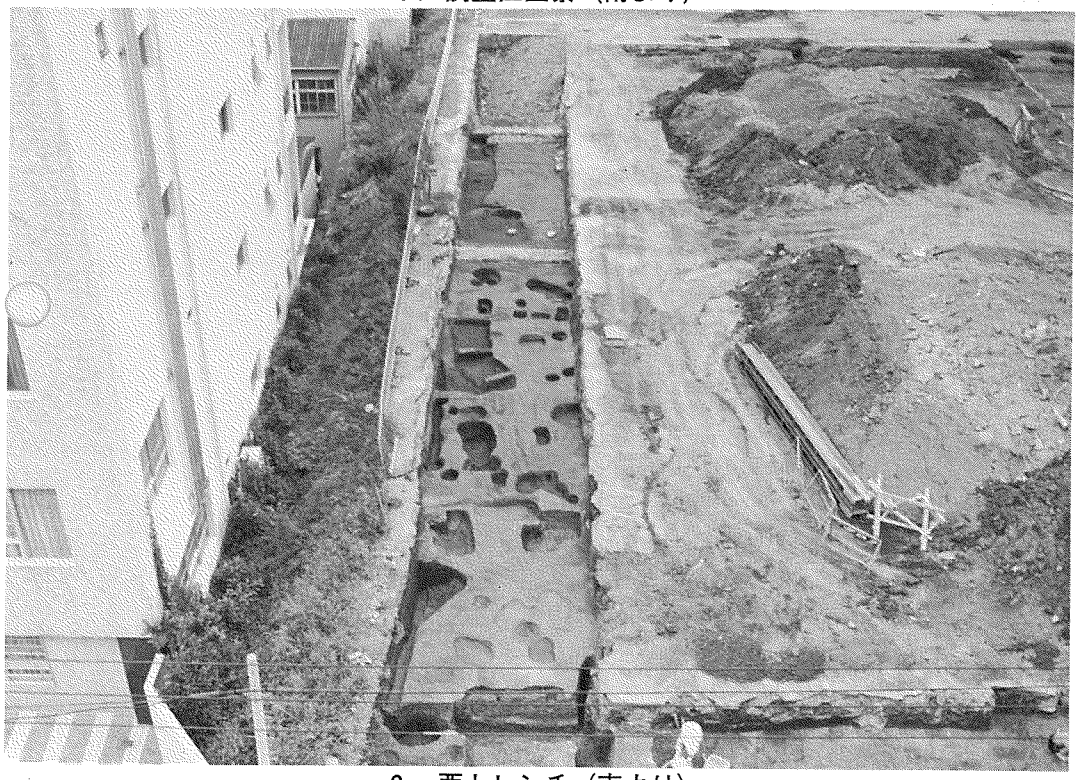


5．F5Gr．木組材検出

写真図版二（上層遺構）



1．調査区全景（南より）



2．西トレンチ（南より）

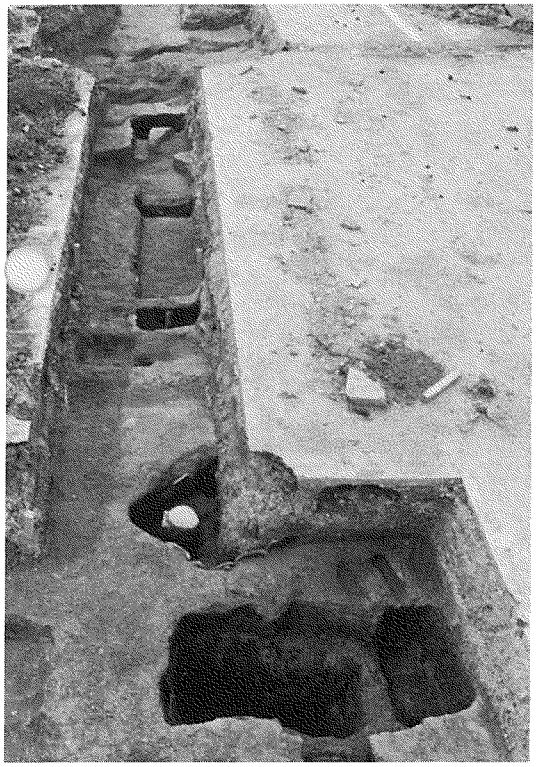
写真図版三（上層遺構）

1．木組材（F5Gr.）

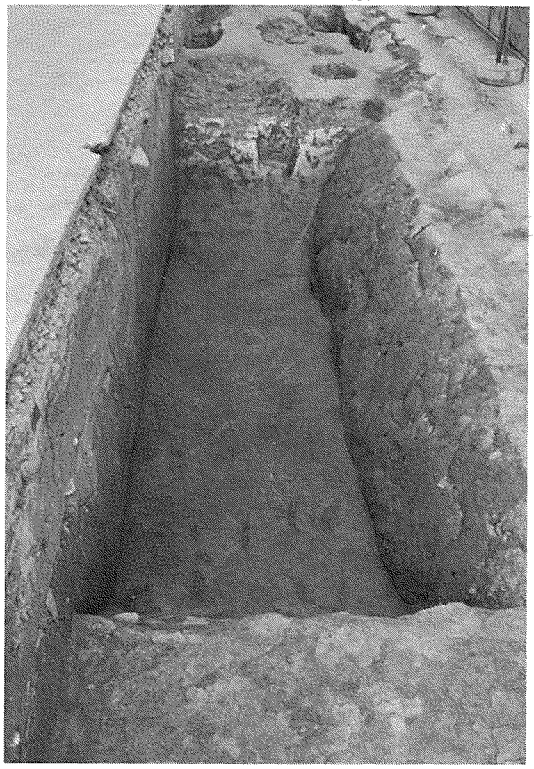
2．溝（F4Gr．D1）

3．井戸（FOGr．E3）

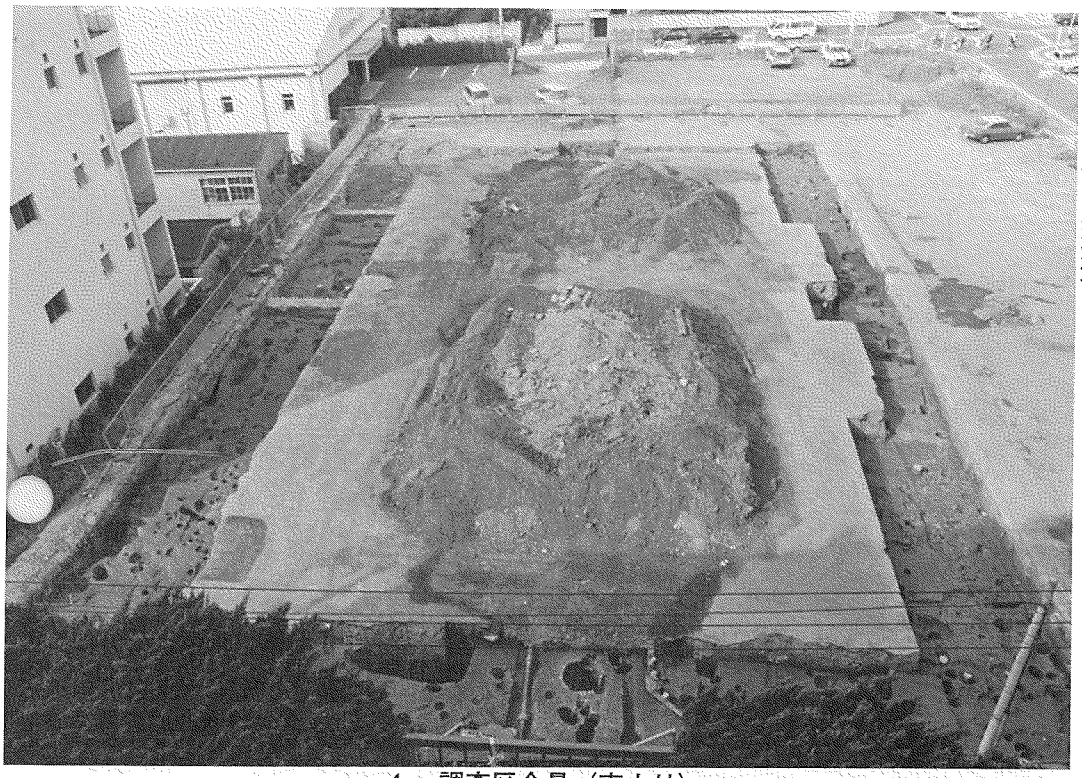
4．H9Gr．全景



5．柱穴（北トレンチ）



6．溝（GOGr．D1）

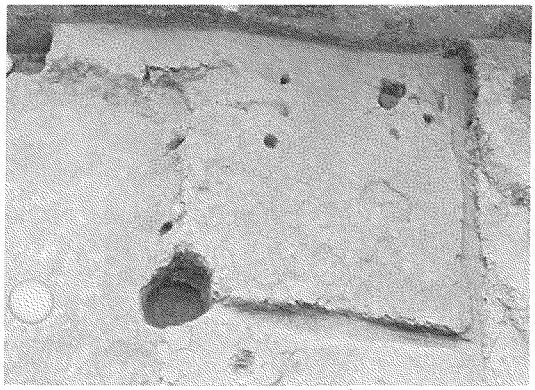


1．調査区全景（南より）

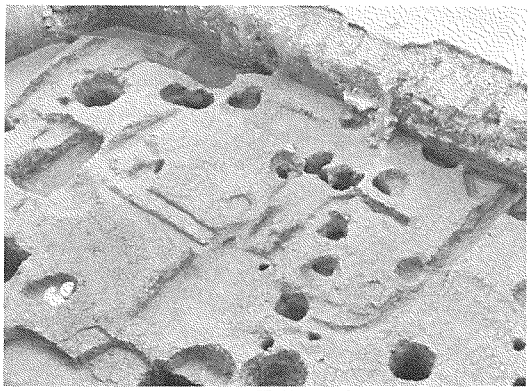
2．南トレンチ（西より）

写真図版五（下層遺構）

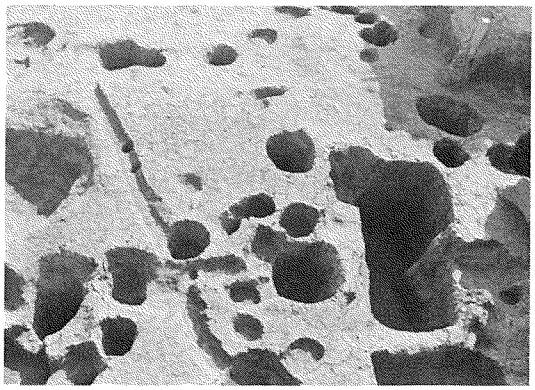
1．西トレンチ（西より）



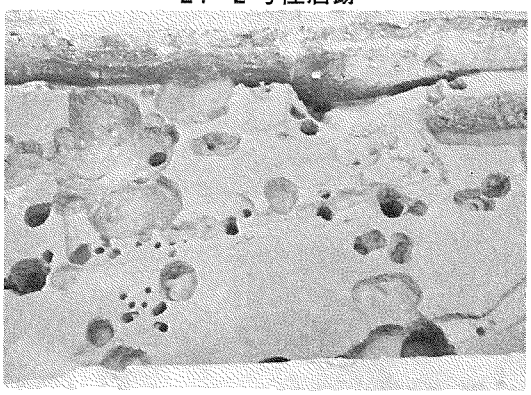
2．1号住居跡



2．2号住居跡



3．3号住居跡



4．5号住居跡

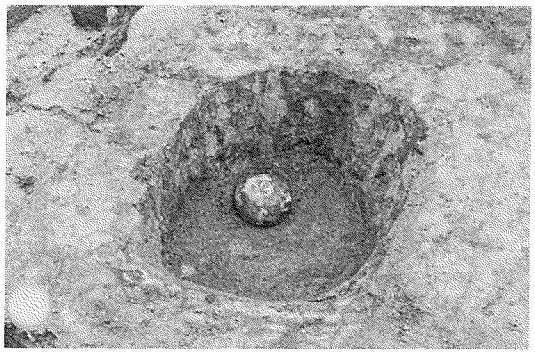
写真図版六（遺物出土状態）

1．E8Gr．包含層

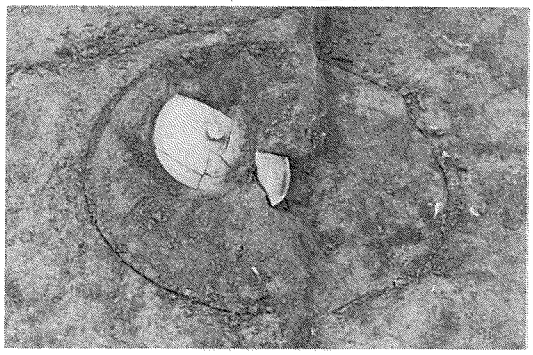
2．D8Gr．包含層

3．F5Gr．P13

4．C8Gr．包含層

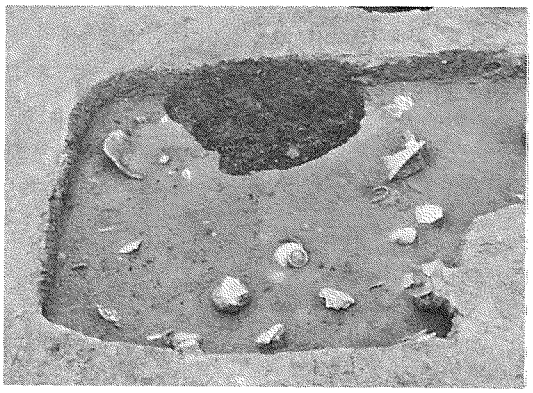


5．F5Gr．P22



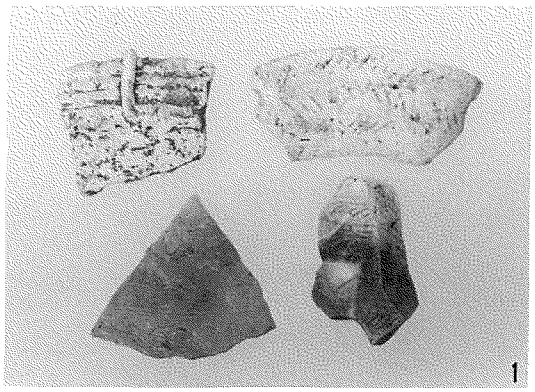
6．A5Gr．K3

7．A5Gr．K16

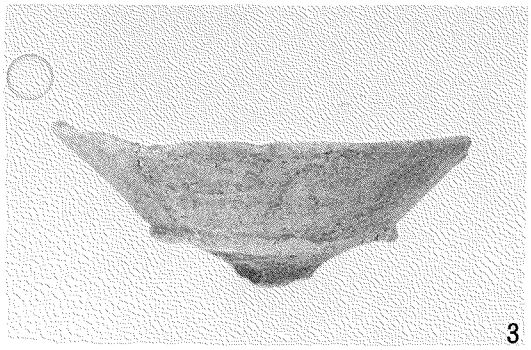


8．F1Gr．K21

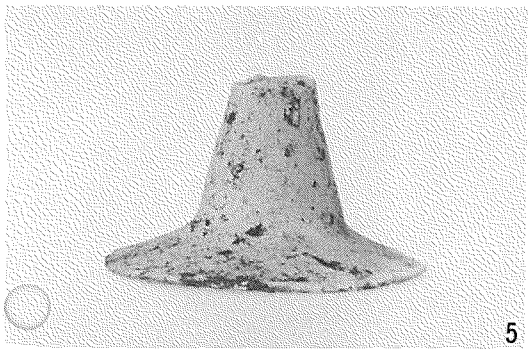
写真図版七（出土遺物）

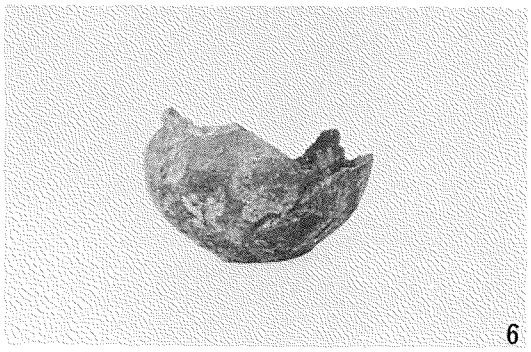

1

2


3

4

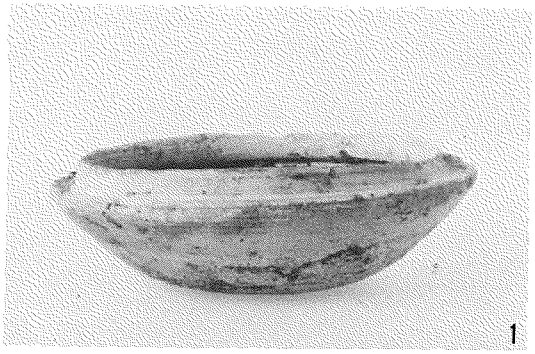

5

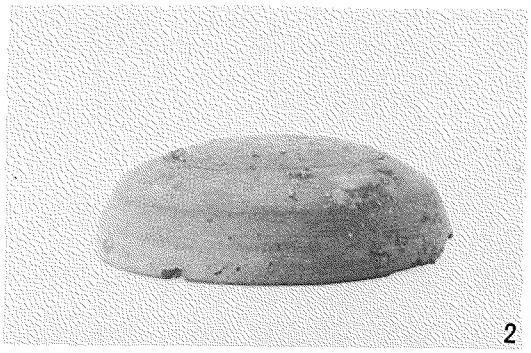

6

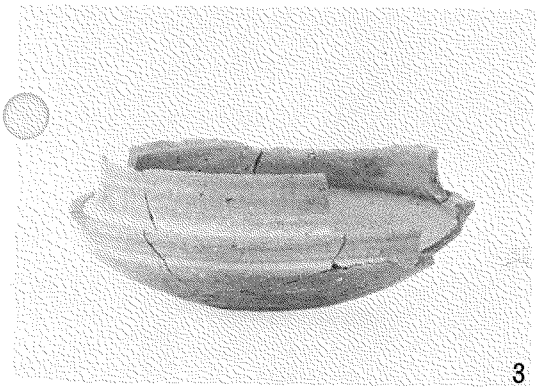
7

8

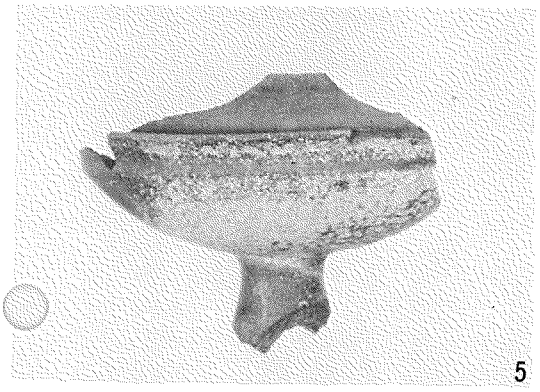
写真図版八（出土遺物）


1

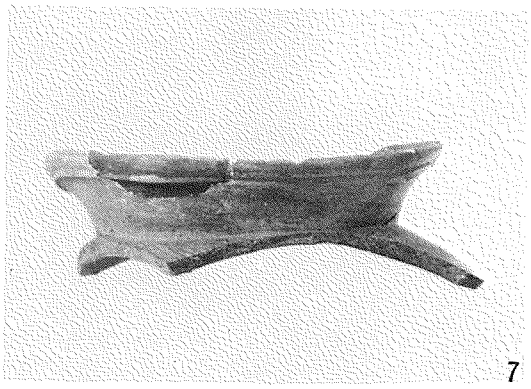

2

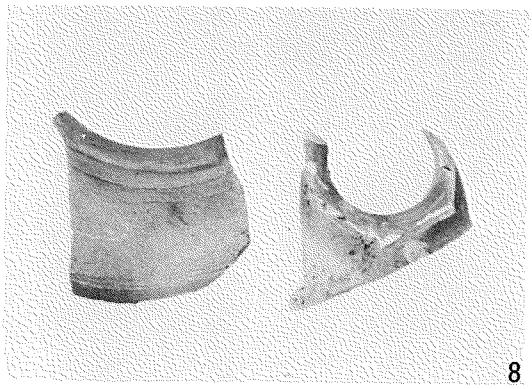

3

4

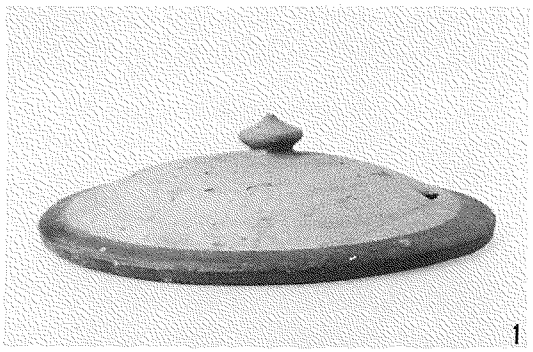

5

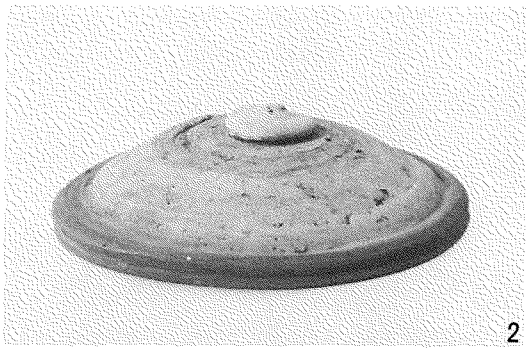
6


7

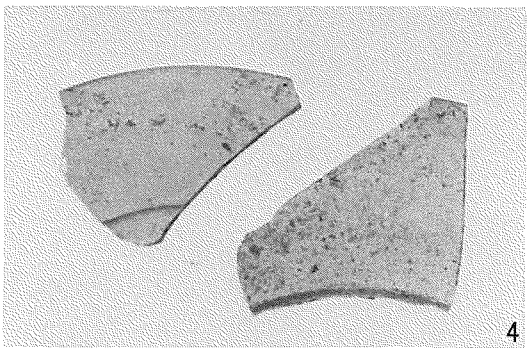

8

写真図版九（出土遺物）

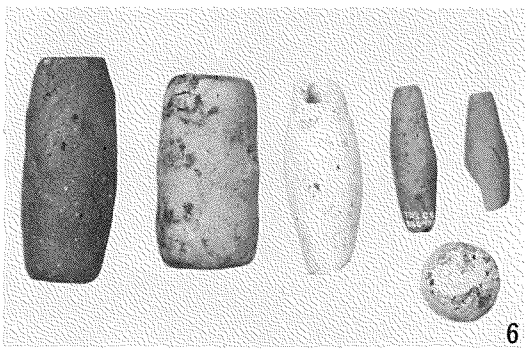

1


2

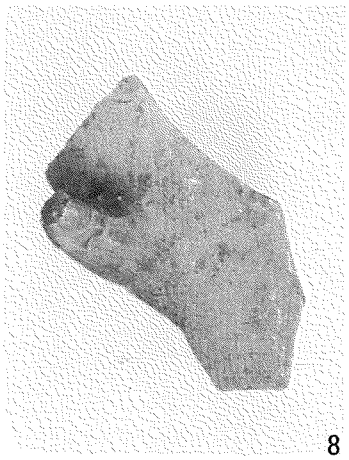
3

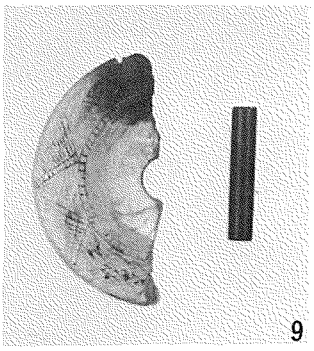

4

5

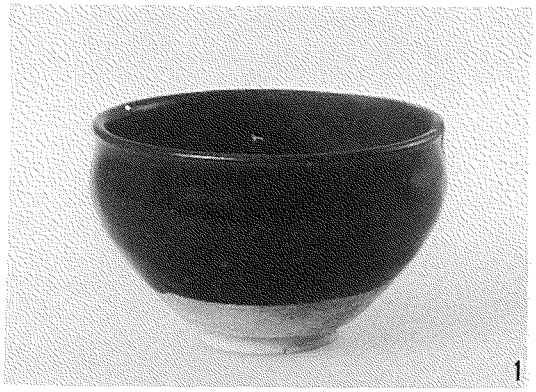

6

7


8


9

写真図版十（出土遺物）

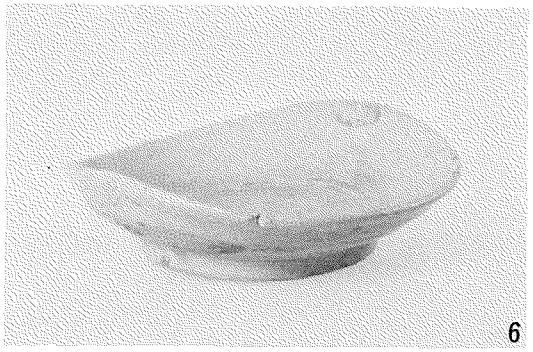

1

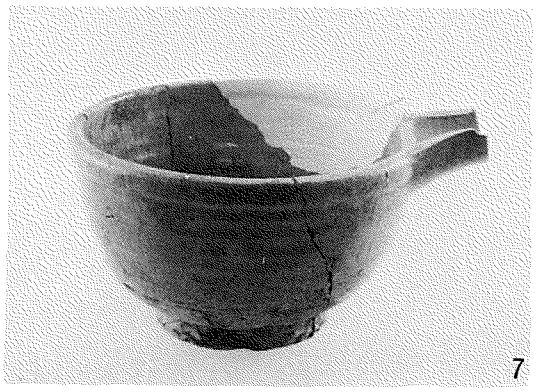
2

3

4

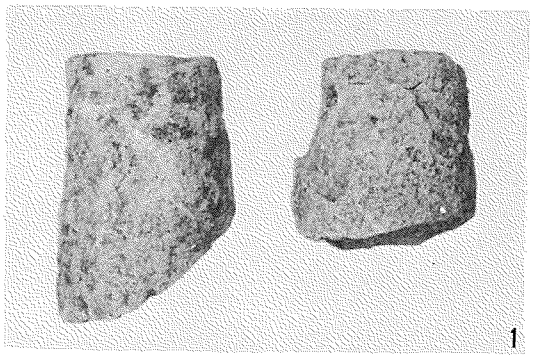
5

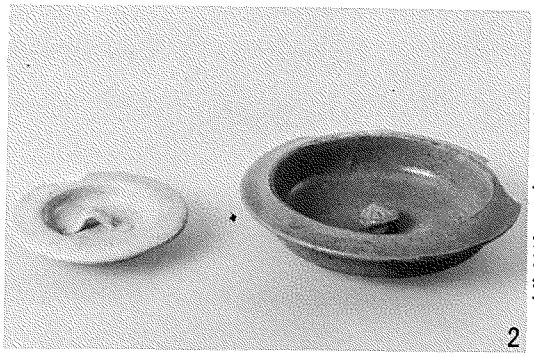

6

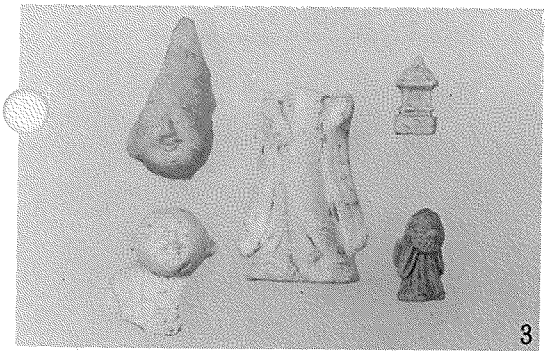

7

8

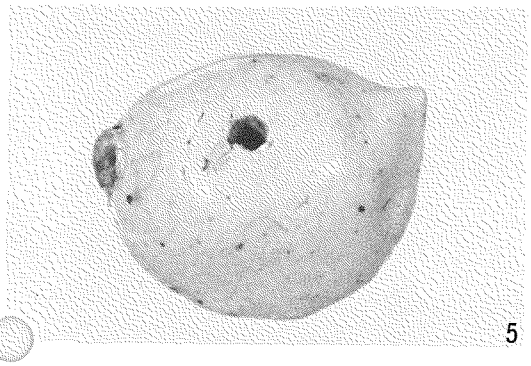
写真図版十一（出土遺物）

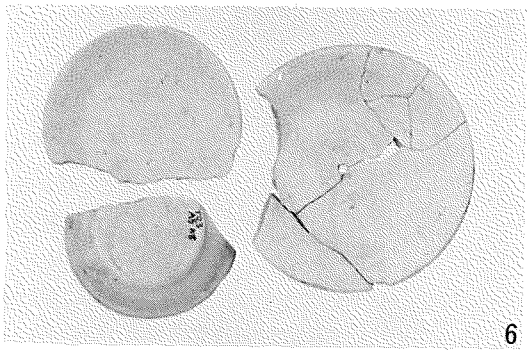

1


2


3

4


5


6

7

8

昭和61年３月31日発行

中区栄１丁目
第Ⅲ次竪三蔵通遺跡発掘調査
概要報告書

編　集　名古屋市見晴台考古資料館
発　行　名古屋市教育委員会
印　刷　澤多印刷有限会社